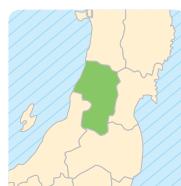


取材日：2014年6月26日



糖尿病



山形県村山医療圏

山形県村山医療圏に根づいた連携の輪を 糖尿病にも生かし、独創的なシステムを運用。

Point of View

- ① 自治体病院の責務と考え、築いてきた病診連携の伝統
- ② 教育入院を「3時間ワンストップ」で受けられる患者のメリット
- ③ 「重症患者は『病』に、軽症患者は『診』に」が生み出すwin-winの関係
- ④ 診療情報提供書には3大合併症の記載と処方に関する情報を詳細に

山形市立病院済生館糖尿病・内分泌内科長／
地域糖尿病センターセンター室長
五十嵐 雅彦先生

山形市立病院済生館
糖尿病・内分泌内科
丹治 泰裕先生

いからし内科循環器科クリニック院長
五十嵐 秀先生

佐藤清医院院長
佐藤 清先生

患者の動機づけに機能する 「3時間ワンストップ」

山形市立病院済生館（以下、済生館）は、2011年に地域糖尿病センターを開設し、糖尿病の地域医療連携を充実させている。同センターは、診療所などのかかりつけ医に受診中であるが、血糖コントロールが不良で治療方針について再構築やアドバイスが必要であったり、腎臓や眼合併症の評価、管理栄養士による栄養指導や、糖尿病療養指導士による療養指導等が必要な患者などを対象として受け入れを行っている。

大きな特徴のひとつとして「3時間ワンストップ」があり、糖尿病の病状、主に慢性合併症の進展度の把

握をし、糖尿病療養指導士による療養や栄養指導を提供している。

完全予約制で、1日3名限定。かかりつけ医の先生が電話、あるいは専用の紹介用紙によるファクスで予約し、患者は平日（月～金曜日）午後に受診する。

「糖尿病は初期治療において、治療の方向性の組み立てと疾患に向き合う患者さんへの動機づけの2点を、しっかりと行うことで合併症の発症率を確実に抑えられます。

『3時間ワンストップ』における栄養指導、食事指導への患者さんの反応はとても良く、動機づけの部分で当初の期待どおりの成果をあげていると感じます」（五十嵐雅彦先生）

患者を紹介する側である、かかり

つけ医の先生方からの評価はきわめて高い。

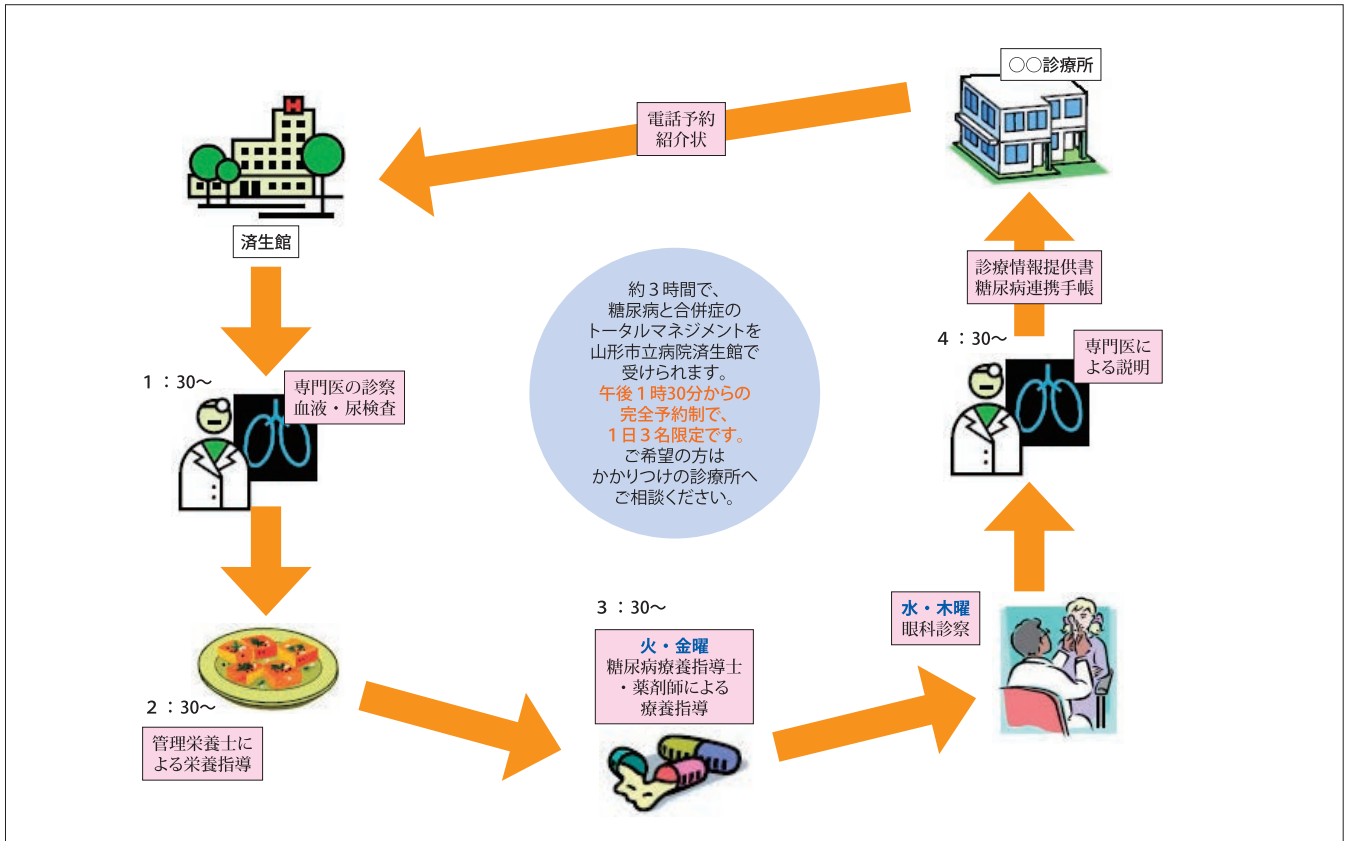
「10日や2週間といった時間を要する教育入院に難色を示しがちな働き盛りの年代の患者さんも、『3時間ワンストップ』の受診には応じてくれます。私は、健診などで新規に糖尿病を指摘された患者さんには、必ずこのシステムを紹介するようにしています」（五十嵐秀先生）

「栄養指導だけをしてほしいといった要望にもフレキシブルに対応してくれるのが、ありがたいです。

曜日の制限もゆるやかで、患者さんにとっても、かかりつけ医にとっても垣根が低くなっており、とても利用しやすいシステムです。受診と糖尿病への取り組みの動機づけに大

【資料1】

地域糖尿病センターの「3時間ワンストップ」の概念(工程)図



きな影響を与えていると思います」
(佐藤先生)

連携の伝統の上に築く
win-winの関係

済生館は、医師不足などから地域の医療が空洞化する問題への取り組みを、自治体病院の責務のひとつで

あると考え、長く積極的に向き合ってきた。

2002年に地域医療連携室を開設し、2004年には疾患領域を問わない病診連携組織「診ます会」を設立。「診ます会」は、総会(年1回)、講演会・シンポジウム(年4回)、症例検討会(年5回)、がん治療症例検討会(年5回)、ニュースレターの発行(年3

回)などを通じ、約200施設のご開業の先生方と日常的に交流している。

また、電子カルテシステムを利用し、インターネットを介してリアルタイムで診療情報を紹介元の医師と共有できる「RenkeiNET@」を2006年に導入、現在約60施設で利用されている。

地域医療連携パスは、大腿骨頸部



左から五十嵐雅彦先生、丹治先生、五十嵐秀先生、佐藤先生

骨折、脳卒中、糖尿病、慢性腎臓病（CKD）などの領域で定着しており、2005年にスタートした糖尿病パスは、当初から循環型をめざして開発されたようだ。

「地域糖尿病センターは、医療連携を大切にしてきた当院の伝統の延長線上に誕生したものです。『3時間ワンストップ』といったユニークな発想の医療サービスがすぐにご開業の先生方に理解され、利用していただけたのは、『診ます会』に代表される、病診間の長年の交流があつてのことでしょう」（五十嵐雅彦先生）

「紹介状を開いて紹介元の先生の名前を読んだ瞬間に、その先生のお顔が思い浮かびます。そういった密接な関係が、『紹介しやすく、紹介されやすい』環境となり、ひいてはアウトプットとなり、患者利益につながっているのだと考えます」（丹治先生）

「当院は、脳卒中やCKDなどでも地域連携をしています。済生館は窓口となる診療科の力量に加え、院内の他の診療科間との連携がスムーズ



お話をうかがった皆さん

なため、紹介した患者さんにも高い満足度を得ていただけています。

また、慢性疾患の場合、軽症になった患者さんは必ず戻していただけます。そういった点における信頼関係は揺るぎないですね」（佐藤先生）

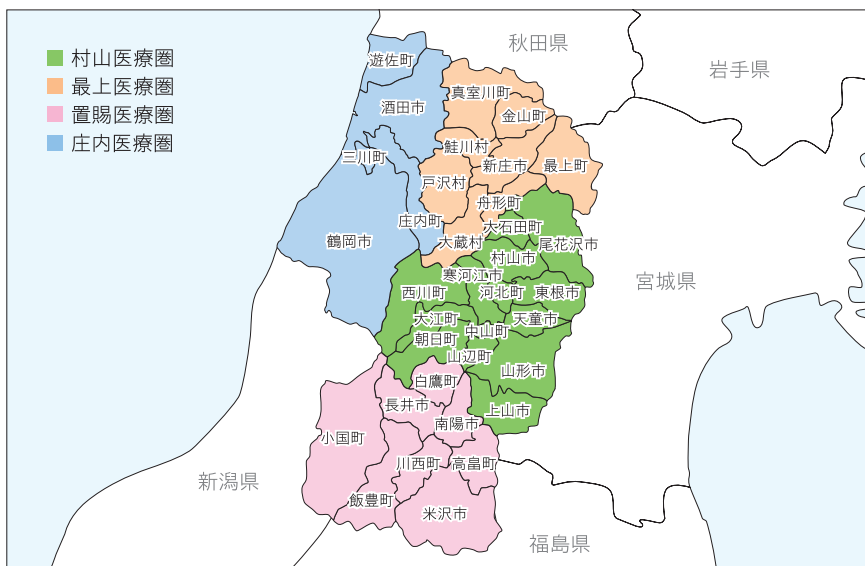
「コントロールが難しくなった患者さんが出たらいつでも済生館に相談できるので、糖尿病の患者さんの受け入れに不安がなくなりました」（五十

嵐秀先生）

「糖尿病・内分泌内科では症状の安定した患者さん、1剤や2剤程度の処方ですむようになった患者さんは、すぐに紹介元の先生にお願いしています。当院で初診をした患者さんでも同様の場合、積極的に逆紹介する方針です。重症患者は当院が、軽症患者はかかりつけ医の先生方がそれぞれ担うことでwin-winの関係が築いていけると考えています」（五十嵐雅彦先生）

【資料2】

山形県内の2次医療圏



診療情報提供書に 合併症評価と処方情報を

済生館は外来診療の場合は2ヵ月後に、入院した場合は入院2週間後には『経過報告書』を作成し、地域医療連携室から紹介元の先生に情報を提供し、病診間の情報共有を確かなものとしている。地域糖尿病センターの「3時間ワンストップ」でも、その姿勢は同様で、診療情報提供書を使って病診間の連携を充実させている。

「診療情報提供書には紹介に対する返信状の意味もありますので、しっかりと丁寧に記載することを心がけて

【資料3】

ニュースレター『診ます会』



2014年6月現在、計36号が発刊されている

います。3大合併症である目と腎臓と神経障害への評価は必ず記載しますし、処方に関するアドバイス等はより具体的に記すようにしています」(丹治先生)

「私は、脳神経外科を専門としていますので、糖尿病に関しては専門家のサポートが不可欠。済生館との連携は、その意味でたいへん貴重です。

機会があるごとに、五十嵐雅彦先生や丹治先生に積極的に質問するようになった自分自身を振り返るにつけ、『ああ、こうして地域の糖尿病医療のレベルが上がっていくのだな』と感じる次第です」(佐藤先生)

スタッフ増員と告知、広報にさらなる注力を

「3時間ワンストップ」の紹介は電話かファクスを利用する。紹介システムを、インターネットなどを使いデジタル化する予定は今のところないという。

「現時点では、紹介患者数が年間100

名未満で推移しており、電話とファクスで十分に機能しています。むやみなデジタル信仰はかえって現場を混乱させますし、利便性を低下させることにもなりかねませんので、当面は現行方式を堅持します。

大切なのはご開業の先生方にとっての使いやすさですので、常に皆様のニーズに耳を傾け、より良いシステムに育てていく考えです」(五十嵐雅彦先生)

今後の課題について聞いた。「地域糖尿病センターの成功の要因のひとつに、長い準備期間をかけ、糖尿病看護認定看護師や糖尿病療養指導士などのメディカルスタッフの育成を行ったことがあります。その成果は連携してくださっている先生方には高く評価していただけています。ただ、地域糖尿病センターを拡充するためには、メディカルスタッフはまだまだ足りず、当面の課題は、あらゆる方策を用いて、そのスタッフ不足を解消することです。

活用次第では、患者さんの大きな

メリットとなる「3時間ワンストップ」システムを、もっとたくさんの連携する診療所の先生方にご理解いただけるよう、告知、広報にもさらに力を入れ、地域の糖尿病医療のレベルアップを前進させていきたいと考えています」(五十嵐雅彦先生)

山形市立病院済生館

〒990-8533
山形県山形市七日町1-3-26
TEL：023-625-5555

いがらし内科循環器科クリニック

〒990-0051
山形県山形市銅町2-24-5
TEL：023-615-6050

佐藤清医院

〒990-0061
山形県山形市五十鈴1-6-56
TEL：023-626-7275